

北海道伊達高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 333名

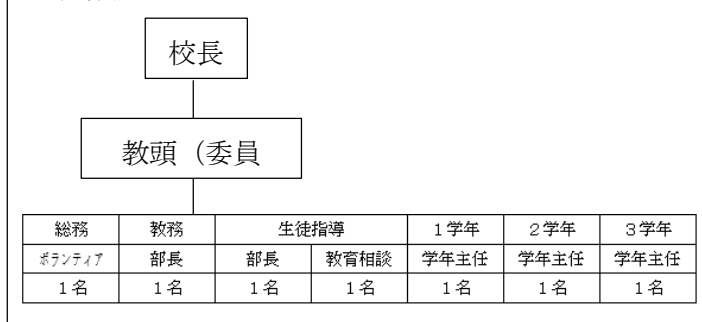
1 取組の特徴

ホームルーム活動・生徒会活動等における活動やボランティア活動などを通して、人間関係を形成する力やコミュニケーション能力を高めるとともに、自己有用感を育成する指導や自己理解・自己管理能力を高める指導の改善・充実を図る。

2 取組のねらい

- 1 コミュニケーション能力等を高める活動等の組織化及び体系化
- 2 コミュニケーション能力等に関するアセスメントの知識や手法の習得
- 3 自己理解・自己管理能力を高める指導の改善・充実

<組織図>



3 取組の経過

- 【5月】
第1回「ほっと」・「アセス」の実施(全学年)
- 【6月】
老人施設訪問による異世代交流(2学年)
- 【8月】
伊達市武者祭市民山車参加 (希望生徒)
宮城県亘理町復興プロジェクト参加 (希望生徒)
- 【9月】
あやめ川清掃ボランティア (1学年)

- 【10月】
宮城県亘理高等学校訪問(生徒会・放送局・新聞局)
コミュニケーション能力を高めようの会(希望生徒)
- 【11月】
第2回「ほっと」・「アセス」の実施(全学年)
伊達市障がい者スポーツ大会運営補助(希望生徒)
伊達地区学校ネットワーク会議での成果発表(伊達市内全学校参加)
- 【2月】
コミュニケーション能力を高めようの会(希望生徒)
伊達市雪祭りボランティア(2学年)

4 取組の内容

- 1 異世代交流 (老人施設訪問) ※6月22日(月)、24日(水)、26日(金)実施

ア ねらい

養護老人ホームを訪問し、お年寄りや介護職員との様々な交流を通して、地域社会の一員である自覚を深めるとともに、自尊感情の涵養を図る。

イ 対象

2学年生徒(96名)

ウ 内容

養護老人ホームを訪問による、お年寄りや介護職員との交流

エ 成果等

様々な方との交流を通じて、地域社会の一員としての自覚を養い、自尊感情の涵養につなげることができた。

4 取組の内容

2 伊達市武者祭市民山車参加 ※8月1日(土)実施

ア ねらい

多くの地域の方々とともに、祭りに参加することを通して、生徒一人一人に地域社会の一員である自覚を認識させるとともに、主体的に行動する意識や積極性を高める。

イ 対象 希望生徒(1学年17名・2学年13名・3学年14名)

ウ 内容

伊達市武者祭における市民山車への参加

エ 成果等

地域の方との交流を通じて、地域社会の一員としての自覚を養い、主体的な態度を育成することができた。



3 伊達市障がい者スポーツ大会運営補助 ※11月8日(日)実施

ア ねらい

市民ボランティアの方々とともに、大会を運営することを通して、生徒一人一人に地域社会の一員であることの自覚を促すとともに、ボランティア活動への関心・意欲を高める。

イ 対象 ボランティアサークル(1～3学年 合計35名)

ウ 内容

伊達市障がい者スポーツ大会における運営の補助

エ 成果等

地域の方との交流を通じて、地域社会の一員としての自覚を養い、ボランティア活動への意欲の高揚につながった。

4 「コミュニケーション能力を高めようの会」実施

※11月10日(火)、12月18日(金)、2月19日(金)実施

ア ねらい

スクールカウンセラーを講師とするコミュニケーション教室を開催することを通して、集団カウンセリング研修による人間関係の構築に係る留意点や工夫について理解を深めるとともに、コミュニケーション能力の向上に向けた関心・意欲を醸成する。

イ 対象 希望生徒(1～3学年 合計12名(延べ人数))

ウ 内容

スクールカウンセラーが講師を務めるコミュニケーション教室への参加

エ 成果等

集団カウンセリング研修を受けることにより、人間関係の構築に係る留意点や工夫について理解を深めることができた。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数及び不登校生徒数は、前年度と比較し若干増えたが、外部関係機関との様々な活動を通して、自己有用感を高め、意欲的に学校生活を送る生徒が増加してきている。

イ その他の指標による評価

遅刻者数及び保健室年間利用者数が前年度と比較し、約3割減少した。また、欠席者数も減少した。

ウ 「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

他者に感謝されることによって、自己の存在感が認められた結果、様々な場面で積極的に活動する姿が見られるようになった(主体性の萌芽が認められた)。

エ 生徒の変容した姿

生徒会活動やボランティア活動への関心・意欲が向上するとともに、規範意識や自己指導能力が向上したことで、より一層、校内生活の落ち着きと充実が顕著となった。

2 課題

生徒間の豊かな人間関係を構築に向け、グループワークやペアワークを、より一層、授業に取り入れるとともに、個の育成に向けた個別指導を積極的に実施する必要がある。

3 次年度に向けて

生徒に自己有用感をもたせ、学校生活における質の向上に向け、より一層の積極性及び主体性の育成を目指す。

北海道追分高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 85名

1 取組の特徴

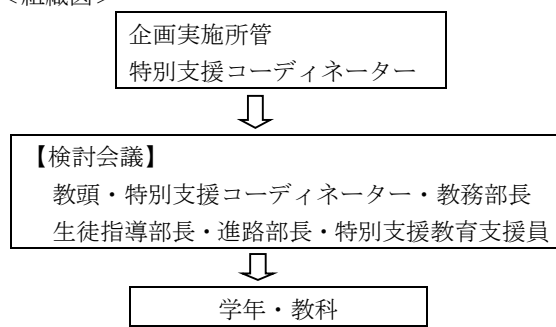
個に応じた指導とコミュニケーション能力を高め自己有用感を育む取組

- (1) スクールカウンセラー（以下SC）やパートナーティチャー（以下PT）、特別支援教育支援員を交えた事例検討会により、個々の生徒に対応した支援を行う。
- (2) 表現力やコミュニケーション能力を身に付ける教科指導を行う。
- (3) リーダー研修により、要となる生徒のスキルアップを図り、ピアサポート活動による温かい学級集団づくりを実現する。
- (4) 異年齢集団との交流学习やボランティア活動を推進し、自己有用感を高める取組を行う。

2 取組のねらい

- (1) 個に応じた指導・支援の充実
- (2) 教科指導の工夫（言語活動の充実やアクティブ・ラーニング、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業）
- (3) リーダーの育成（生徒会活動の充実・リーダー研修）
- (4) 自己有用感を育む体験活動（ボランティア活動や異年齢集団との交流）

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 【4月】リーダー研修会
（生徒会役員・学級代表） 【5月】教科学年生活会議（PT参加） 【6月】リーダー研修会
（生徒会役員・学級代表）
職場体験学習（2学年）
「ほっと」の実施
ボランティア活動
（安平町内小学校運動会） 【7月】職場体験学習報告会（2学年）
学校祭係活動（全学年） 【8月】校内研修
ボランティア活動（夏祭り） | <ul style="list-style-type: none"> 【9月】異年齢集団交流
ボランティア活動（秋祭り） 【10月】宿泊研修・異年齢集団交流
リーダー研修会（生徒会役員・学級代表） 【11月】見学旅行・異年齢集団交流 【12月】教科学年生活会議・見学旅行報告会
体育大会学級活動 【2月】年度末反省会議
「ほっと」・「アセス」実施
ボランティア活動
（町内ロビーコンサート） 【3月】リーダー研修会
（生徒会・学級代表・部長） |
|---|---|

4 取組の内容

1 教科学年生活会議・校内研修

ア ねらい

「ほっと」の結果を基に学級集団の傾向を確認するとともに、専門家（SC、PT、特別支援教育支援員）を交え、生徒の様子について情報交換し、学級集団と生徒一人一人へのアプローチの方法を検討し、実践する。

イ 対象 教員・SC・PT・特別支援教育支援員

ウ 内容

- ①教科学年生活会議
 - ・5月13日 入学生の様子を中心に情報交流 PTより助言
 - ・12月11日 1年間の生徒の様子について情報交流、PT、支援員の助言を受けユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を提案
- ②校内研修
 - ・8月 「ほっと」の結果から学級の課題、解決の方針について検討、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業
 - ・9月19日 「ほっと」結果から学級の様子と課題、解決の方策について意見交流

エ 成果等

学級集団と生徒一人ひとりへのアプローチの手法について理解を深めた。

4 取組の内容

2 表現力やコミュニケーションスキルの向上を意識した教科指導・ボランティア活動の推進

ア ねらい

外部の方との交流や学習内容のまとめ及び発表場面を意識的に設定することにより、進路実現につなげるとともに、各自の表現力の向上を図る。

イ 対象 2学年・3学年

ウ 内容

- ①職場体験学習と報告会（2学年）
- ②見学旅行（英語課題、海外の人へ英語でインタビュー）・報告会（2学年）
- ③家庭科（2学年）及び選択授業（3学年）における学習成果発表会
生涯スポーツ（3学年）における町内パークゴルフ協会とのパークゴルフ交流
生活福祉援助技術（3学年）における町内養護老人施設・保育園・小学校での交流学习
- ④町内施設でのボランティア活動
 - ・ノーザンホースパークマラソン走路ボランティア（15名）
 - ・福祉施設夏祭りボランティア（21名）
 - ・安平町ロビーコンサート、アイスキャンデル制作・設営（15名）
 - ・早来小学校運動会ボランティア（13名）
 - ・追分小学校寺子屋朝活ボランティア（3名）



エ 成果等

体験学習と報告会でのプレゼンテーション形式の発表場面を各教科で設定することで自己表現の機会が増え、発表への自信につながった。また、校外の幅広い年齢層の方との交流を通し、自己有用感が高まり、ボランティア活動への参加者が増えた。

3 校内リーダー研修におけるコミュニケーショントレーニング

ア ねらい

相手の意見を聞くことや、自らの意見も伝えることなどのコミュニケーションスキルを高め、クラスや学校生活の中で仲間強化や支援援助のできるリーダーを育成する。

イ 対象 生徒会執行部・学級代表

ウ 内容

年間4回実施（ピアサポートトレーニング、マッシュマロチャレンジ、アサーティブトレーニング、グループエンカウンター、自分を知る、アンガーマネジメント、ロールプレイ）

エ 成果等

様々な研修を通して、リーダーのコミュニケーション能力の育成を図ることができた。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

不登校生徒は前年度と同様でいなかったが、中途退学者は2名いた。様々なボランティア活動の機会を設けることにより、コミュニケーション能力が高まり、他者を思いやる気持ちの育成を図ることができた。

イ その他の指標による評価

「アセス」及び「ほっと」等の数値を分析し、その結果をクラス経営に役立て、生徒に対するきめ細やかな指導を行うことができたことから、保健室年間利用者数が減少した。

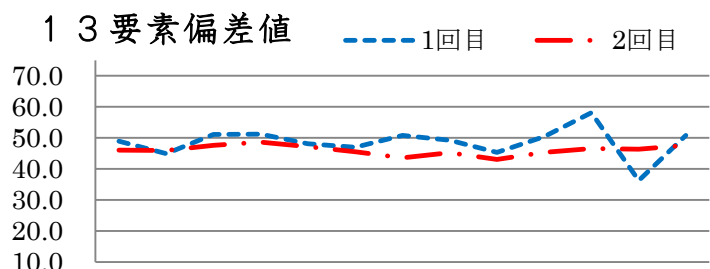
北海道教育カウンセリングICT活用事業において、スーパーバイザーから「ほっと」の分析について、指導・助言をいただいた。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

【1学年】 6月実施の結果では、「学習の分からないところを友達・先生に聞くことができ

る」の質問項目の学級平均が落ち込んでいたが、個に応じた教員の働きかけと教科におけるアクティブ・ラーニングの実践等により、生徒同士の教え合いの雰囲気づくりが浸透し、2月実施の結果では向上が見られた。

1.3 要素偏差値



礼儀 表明 参加 配慮 拒否 緊張 称赞 遵守 忠告 自律 率先 学業 相談

5 次年度に向けて

【2学年】 6月実施の結果では4因子の「仲間強化」に関する項目が低かったが、2月実施結果では「仲間強化」を含め、他の3因子（関係維持・自己統制・援助要請）にも向上が見られた。リーダー研修等により、高校生活の中心となる2学年のスキルアップが図られ、学級をまとめるピアサポーターへの意識付けがなされたものと考えられる。

【3学年】 2学年時2月の結果、3学年時6月の結果、2月の結果を比較すると13要素の項目のほとんどが上昇し、4因子も全て向上した。特に「仲間強化」は2年時の56.2が3年時66.7へと10ポイントの上昇が見られた。「関係維持」は最も高く76.4となった。

4因子得点	関係維持	仲間強化	自己統制	援助要請
2学年時2月	71.1	56.2	61.3	62.0
3学年時6月	71.6	56.8	63.7	66.7
3学年時2月	76.4	66.7	66.4	69.4

エ 生徒の変容した姿

ホームルーム担任及び教科担任が、自己表現力を育成するための発表の場や異年齢交流の機会を積極的に取り入れたことにより、自己有用感が高まり、より一層前向きに学校生活に取り組む姿勢が見られるようになった。

クラスの代表を対象に「校内リーダー研修」や「ピアサポートトレーニング」を継続的に実施するとともに、全校生徒を対象にコミュニケーション能力の育成に資する講演会を実施したことにより、校内全体に他者を思いやる姿がより一層見られるようになった。

2 課題

- ア 年々増加傾向にある特別な支援を必要とする多様化する生徒へのフォローアップ体制の工夫が必要である。
- イ 表現力やコミュニケーション能力を身に付けるための取組を継続し、「ほっと」における学級集団の4因子の底上げを図る必要がある。
- ウ 問題を抱える生徒の実態把握（「アセス」・「ほっと」・教科学年生活会議）と早期対応により、学校生活及び学業への不適応による中途退学者数を減少させる必要がある。

3 次年度に向けて

ア 「アセス」や「ほっと」結果の早期活用

- ・2、3学年には、2月実施の結果を踏まえ、4月からの学級経営に生かす。
- ・1学年については、中学校と連携を図るとともに、6月実施の結果をもとに学級状況を把握し、課題解決に向けた校内研修やPT・SC・特別支援教育支援員を交えたケース会議を開き、対策を検討する。

イ 表現力やコミュニケーションスキル向上を意識した教育活動の継続

- ・リーダー研修内容の検討と実施時間の確保により、生徒執行部や学級のリーダーの更なるスキルアップを図る。
- ・教科指導の工夫（アクティブ・ラーニング、ユニバーサルデザイン）と学習成果の発表の時間確保により、自己表現力の向上を図る。

北海道登別青嶺高等学校

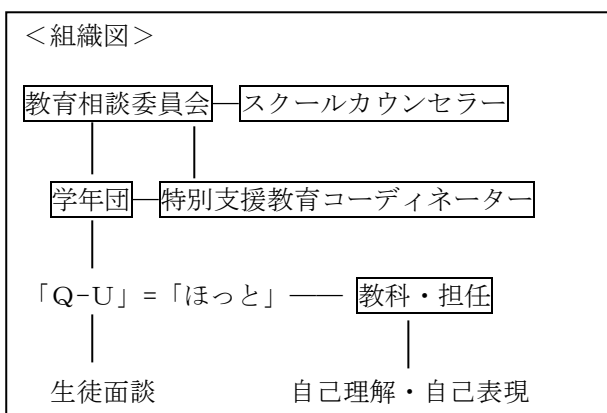
課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 447名

1 取組の特徴

- (1) 「携帯電話の預かり指導」等、校内における生徒同士のコミュニケーションの機会を増やすための取組をはじめとした生徒指導の強化を図るとともに、授業にアクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、ペアワーク及びグループワークを活用した言語活動や表現力の育成を図る取組の充実
- (2) 「Hyper-QU」や「ほっと」等のアセスメントを活用し、学級経営及びスクールカウンセラーによる個別相談と情報共有による教育相談体制の確立

2 取組のねらい

- 1 良好な人間関係の構築
- 2 「Hyper-QU」・「ほっと」の分析による、きめ細かい生徒対応と生徒指導の取組の検証
- 3 スクールカウンセリングによる個別の生徒の困り感への対応
- 4 自己理解・自己表現を高める取組の推進



3 取組の経過

- 教育相談委員会の月例開催
 - スクールカウンセラーによる個別カウンセリング (年間20回)
- 【6月】「Q-U」実施及び分析 (全学年)
 【7月】エゴグラムによる自己理解 (1学年)
 【8月】「ほっと」実施 (全学年)

- 【10月】見学旅行研修報告会による自己表現スキルアップ (2学年)
 【11月】職業調べとクラス発表による自己表現スキルアップ (1学年)
 【12月】外部講師によるマナー講座 (2学年)
 【2月】「ほっと」実施及び分析 (1・2学年)

4 取組の内容

- 1 外部講師によるマナー講座 (ペアリングによるコミュニケーション活動)

ア ねらい

基本的なビジネス (接遇) マナーについての学習を通して、コミュニケーション能力の育成を図るとともに、好感の持たれる身だしなみや挨拶、話し方等についての理解を深める。

イ 対象 1・2学年

ウ 内容

ビジネス (接遇) マナー講座の受講

エ 成果等

基本的なビジネスマナーの知識を身に付け、その上で他者とコミュニケーションを図る上で気を付けるべき身だしなみ、挨拶、話し方等への理解を深めることができた。



4 取組の内容

2 携帯電話預かり指導と人間関係能力の育成（生活アンケートに見る携帯電話の状況）

ア ねらい

携帯電話に頼らないコミュニケーション能力の育成を図る。

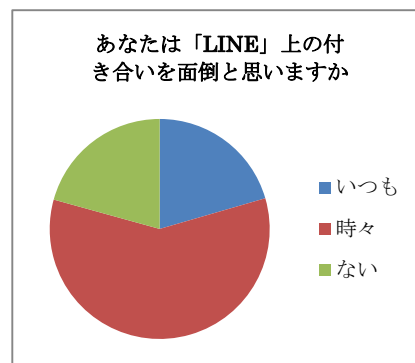
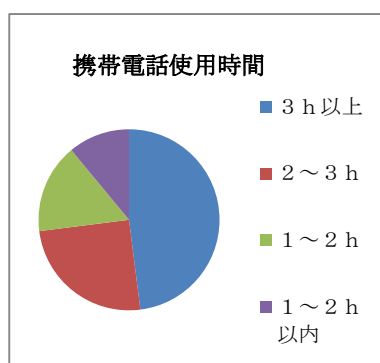
イ 対象 全学年

ウ 内容

携帯電話預かり指導及び人間関係形成能力の育成

エ 成果等

「生活アンケート」における本校の携帯電話使用の実態として、3時間以上が



約48%、2～3時間が約25%であり、合計すると7割を超える生徒が1日2時間以上利用すると回答している。また、「『LINE』上の付き合いを『ときどき』又は『いつも』面倒であると感じる」が約79%もいることから、必ずしも「LINE」等のソーシャルネットワークツールを手放して喜んで利用しているわけではないという結果となった。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

保護者と連携しながら生徒に継続的に指導を行い、「中途退学」又は「不登校」に繋がる要素のある生徒は恒常的に相当数が存在するにも関わらず、意欲を持って学校生活を送る生徒が増えていることから本取組の有効性を認識している。

イ その他の指標による評価

「Q-U」によるクラス分析では、全クラスで「学校生活意欲総合点」が全国平均を上回った。結果を分析し、特別な支援を必要とする生徒への個別カウンセリングを実施し、改善を促している。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「ほっと」による生徒のコミュニケーションスキルの概況は、概ね全道平均を上回り、社会的スキルがバランスよく身に付いている。その中でも「関係維持因子」が高く、高い規範意識に基づいたコミュニケーションスキルが構築されている。

エ 生徒の変容した姿

例年、年度末に実施している生徒アンケート（4点満点）の結果を昨年度と比較してみると、「私は友人との人間関係に満足している」の項目において3.14→3.24、「本校は携帯電話等に頼らないコミュニケーション力育成に努めている」の項目において2.93→2.98となっており、本取組が実を結んでいることが分かる。

2 課題

ア 近年、保健室利用者が増加傾向にある。人間関係の悩み等の訴えが多く、継続的に個別カウンセリングを行う必要がある。

イ 保護者との連携の在り方について、特に特別支援教育に関わる場面では効果的な連携が図りにくい。

3 次年度に向けて

ア 教育相談を通じた生徒理解と規範意識を醸成させる指導を学校全体で、いかにバランスよく連携を図りながら進めるかについて、教育相談委員会を中心に「情報発信」、「情報共有」及び「実践と検証」するための方策を検討する。

イ 特別支援教育に関する教員の理解を図るための研修会を実施し、具体的な対応方法や教員連携の在り方など、よりよい対応についてスキルアップを図る。

北海道鷗川高等学校

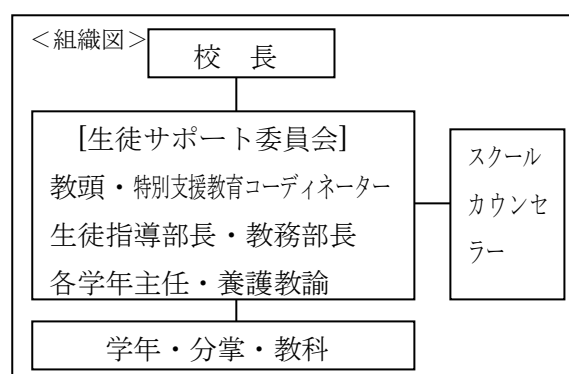
課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 189名

1 取組の特徴

- (1) 「クラスづくり」の取組
 コミュニケーションスキル向上のためのトレーニングや講話、人間関係づくりを支援する集団カウンセリングを定期的実施する。
- (2) 教育相談体制の充実
 スクールカウンセラーによる個別カウンセリング、担任や学年団による定期的な面談など、全校生徒対象の教育相談を実施する。

2 取組のねらい

1・2学年を中心に「クラスづくり」と称したコミュニケーション能力や人間関係を形成する力の育成に資する取組を継続的に実施するとともに、校内の教育相談体制を充実させることで、不登校・中途退学・いじめ等の問題行動の未然防止及び早期対応に取り組む。



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>【4月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学年「クラスづくり①」 ・1学年宿泊研修における集団カウンセリング <p>【5月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学年「クラスづくり②③」 ・「Hyper Q-U」におけるアセスメント ・中高合同ボランティアにおける実践 <p>【6月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内教育相談 ・2学年「クラスづくり④」 ・体育大会における実践 <p>【7月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学年「クラスづくり⑤」 ・学校祭における実践 <p>【8月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっと」によるアセスメント ・1学年「クラスづくり①」 ・スクールカウンセラーによる教育相談① <p>【9月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学年「クラスづくり⑥」 ・1学年「クラスづくり②③」 ・スクールカウンセラーによる教育相談② | <p>【10月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっと」によるアセスメント ・2学年「クラスづくり⑦」 ・1学年「クラスづくり④」 ・校内教育相談 ・インターンシップにおける実践 <p>【11月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学年「クラスづくり⑧」 ・1学年「クラスづくり⑤」 <p>【12月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Hyper Q-U」によるアセスメント ・見学旅行における実践 ・体育大会における実践 <p>【1月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学年「クラスづくり⑨」 ・スクールカウンセラーによる教育相談③ <p>【2月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学年「クラスづくり⑩」 ・スクールカウンセラーによる教育相談④ <p>【3月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっと」によるアセスメント |
|---|---|

4 取組の内容

1 2学年「クラスづくり」の具体的な取組

ア ねらい

「クラスに対する所属意識の高揚」、「協調性の育成」、「コミュニケーション能力の育成」、「進路意識の高揚」、「自己理解の深化」など

イ 対象 2学年

ウ 内容

- ・「クラス会議」：複数の班に分かれ、クラス目標等を話し合う。
- ・「鶴川ツリー」：模造紙とセロハンテープを使い、自立型のタワーを作成し、高さを競う。
- ・「WINWINじゃんけん」：公平にじゃんけんに勝つことのできる方法を考える。
- ・「絵本セラピー」：講師（絵本セラピスト）による絵本の読み聞かせの後、簡単な問いかけを行い、感じたことを書き、発表し合う。
- ・「電話アポ・ロールプレイ」：インターンシップの事前学習として、電話対応のロールプレイを行う。
- ・「見学旅行の係会議」：見学旅行のルールの決定や改正について話し合う。
- ・スクールカウンセラーによる講話：エゴグラムを利用し、自己理解を深める。スクールカウンセラーの講話によりキャリア発達理論について学ぶ。



【鶴川ツリーの様子】

エ 成果等

- ・「殺伐とした雰囲気がいりやりのある学年に変わった。」、「生徒が落ち着いて学校生活を送ることができるようになった。」、「前向きで明るい素直な生徒が増えた。」、「コミュニケーション能力が高まった。」、「行事等での団結力が向上した。」と教員が感じており、生徒の人間関係形成能力が醸成されてきている。
- ・1学年の後期より「クラスづくり」に取り組んでおり、取組の開始前と開始後の「ほっと」の結果において、13要素偏差値のすべての項目で数値の上昇が見られたことから、コミュニケーション能力が向上していることが分かる。



【絵本セラピーの様子】

2 1学年「クラスづくり」の具体的な取組

ア ねらい

「コミュニケーション能力の育成」、「自己理解及び他者理解の深化」など

イ 対象 1学年

ウ 内容

- ・スクールカウンセラーによる講話：へりくだった自己紹介などの演習を取り入れ、短所を長所に言い換えることで自分の良さに気付く。
- ・「絵本セラピー」：講師（絵本セラピスト）による絵本の読み聞かせの後、簡単な問いかけを行い、感じたことを書き、発表し合う。
- ・スクールカウンセラーによる講話：アサーションチェックシート等を活用し、アサーティブなコミュニケーションについて学ぶ。
- ・スクールカウンセラーによる講話：ロールプレイを取り入れ、よりよい話の聴き方を知る。
- ・「これはなんだろう？」：数種類の図形が何に見えるかをグループ内で互いの考えを伝え合う。



【宿泊研修の集団カウンセリングの様子】



【スクールカウンセラーによる講話の様子】

エ 成果等

「コミュニケーションの方法や大切さが理解できた」、「今後の学校生活に生かしたい」という感想を持つ生徒が多数いることから、より良いクラスづくりに資する取組となっている。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

不登校生徒数には大きな変化は見られないが、1学年における中途退学者数（7→1）が減少しており、中でも、学校不適応による中途退学者数（4→0）は大きく減少している。これは「クラスづくり」の取組と校内の教育相談を充実させた効果であると考えられる。

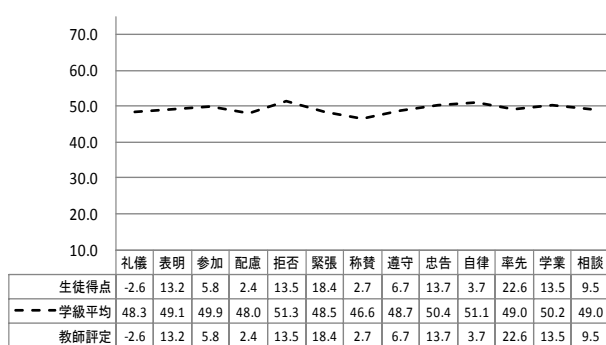
イ その他の指標による評価

保健室利用者数（1390→1286）、相談者数（232→158）ともに大きな変化はないが、1学年と2学年において、件数（1学年における保健室利用者数：583→314、相談者数：59→33、2学年における保健室利用者数：624→559、相談者数：155→64）が減少している。これは校内の教育相談活動を充実させた効果であると考えられる。

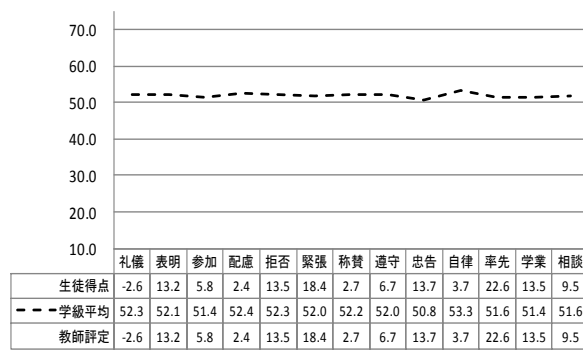
ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- 2学年における「クラスづくり」の取組の前と後の「ほっと」の結果の比較において、全ての項目で偏差値が上がっている。このことから、思いやりの心を持つ生徒が増え、互いに認め合うまとまりのある集団に変容してきたことが読み取れる。また、コミュニケーション能力の低かった生徒が、「クラスづくり」等の取組によってコミュニケーション能力を身に付け、全体的にコミュニケーション能力が向上したことが読み取れる。

【2年生 平成25年8月（「クラスづくり」開始前）】



【2年生 平成26年10月（「クラスづくり」開始後）】



- 1学年については、「クラスづくり」の取組の開始前に「ほっと」を実施し、13項目の要素偏差値はほぼ全道平均と一致しているが、合計点の偏差値と人数分布を見ると、偏差値の低い者から高い者までが幅広く分布しており、コミュニケーション能力の低い者と高い者が混在している集団であることが読み取れる。

エ 生徒の変容した姿

「クラスづくり」を実施した後、「コミュニケーションの方法や大切さが理解できた。」「学んだことを学校生活で生かしたい。」という前向きな感想を持つ生徒が増えた。

また、日常の学校生活の中で、クラスのまとまりや落ち着き、生徒の思いやりやコミュニケーション能力の向上を教員が実感することが増えた。

2 課題

本校における取組の大きな特徴である「クラスづくり」の内容をより充実させるため、教員のピアサポートや構成的グループエンカウンター等、集団カウンセリングについての研修と、日常からの取組が必要である。

また、「ほっと」の結果により、生徒の変容を把握したいと考えているが、「ほっと」を検証するための教員の知識が不足しているため、研修が必要である。

3 次年度に向けて

次年度は、今年度の取組である「クラスづくり」と「教育相談活動」を継続するとともに、内容をより充実させ、授業においても、より多くグループワークやペアワークの機会を取り入れることで、日常的にコミュニケーション能力の向上を図る。そのために、指導する教員が集団カウンセリングの手法を身に付けられるよう、校内において研修する機会を確保する。

また、生徒のコミュニケーション能力の変容を「ほっと」により把握し、より生徒の実態に合った取組にしたいと考える。そのために、「ほっと」の検証方法についても校内で研修する機会を確保する。

北海道富川高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科・商業科
 生徒数： 91名

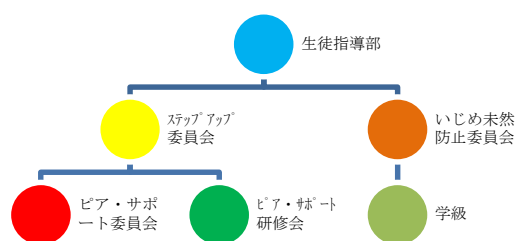
1 取組の特徴

- 1 全校生徒を対象にコミュニケーションスキルの育成を図るトレーニングを実施し、望ましい人間関係形成能力を身に付けさせる。
- 2 不登校や人間関係等で問題を抱える生徒に対応するために、教職員向けの研修を実施し、生徒理解や教育相談に活用するための能力を身に付ける。
- 3 希望生徒を対象に実施しているピア・サポート研修を受講している生徒が、ピア・サポーターとして校内ピア・サポート活動の中核となるよう育成する。

2 取組のねらい

- 1 全校生徒対象の校内ピア・サポート研修会の在り方等について検討し、より一層の充実を図る。
- 2 スクールカウンセラーの有効活用方法について工夫し、親しみやすい教育相談体制の構築を図る。
- 3 「ほっと」及び「アセス」の診断結果の分析を教職員の共通理解として、生徒支援を行う。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|--|
| <p>7月 1年生を対象としたコミュニケーションスキル育成のためのトレーニング</p> <p>9月 全学年を対象とした「ほっと」「アセス」の実施</p> <p>9月 「ほっと」「アセス」の活用についての教員研修</p> <p>9月 1年生を対象としたコミュニケーションスキル育成のためのトレーニング</p> <p>10月 ピア・サポーター活動</p> | <p>11月 実施内容を深めるための教員研修</p> <p>12月 全学年を対象とした「ほっと」「アセス」を実施</p> <p>1月 1年生を対象とした宿泊研修にてコミュニケーションスキルを実施</p> <p>1月 「ほっと」「アセス」の分析結果を活用した教員研修</p> <p>2月 プログラム検証と今後の活用方策について</p> |
|---|--|

4 取組の内容

「ほっと」及び「アセス」を活用した予防的・開発的教育相談の実施

(1) ねらい

「ほっと」及び「アセス」を活用し、生徒の教育相談に生かすこと。

(2) 対象

全学年を対象とする。

(3) 内容

- ア コミュニケーションスキル育成のためのトレーニング
- イ ピア・サポート研修の充実及びピア・サポーターの養成
- ウ スクールカウンセラーによるレクチャー

4 取組の内容

(4) 成果等

ア コミュニケーションスキル育成のためのトレーニング

1年生を対象に、相手の気持ちを理解するために、人と人の『間』を大切にするというテーマでトレーニングを行った。生徒からは、「会話の重要性と傾聴する気持ちの大切さについて学ぶことができた。」、「トレーニングをとおして、生徒同士の親密度が深まることにより、クラスの絆が強くなった。」などの感想があった。



イ ピア・サポート研修の充実及びピア・サポーターの養成

昨年、課題が見られたピア・サポート研修を、ボランティア同好会の協力を得ながら放課後活動に取り組んだ。生徒からは、「初めは緊張していましたが、徐々に自分なりに納得しながら取り組むことができた。」、「ピア・サポート研修は、生徒同士で支え合えることを目指したトレーニングなので、より一層の活性化を目指します。」などの感想があった。



ウ スクールカウンセラーによるレクチャー

2年生を対象に、スクールカウンセラーから、「自己開示と受容」というテーマでレクチャーした。前半は講義を聴き、後半には「最近言われて嬉しかった言葉」について、グループに分かれて協議した。生徒からは、「話を聴く側の態度として大切な、『相手を否定しないこと』、『受容的な気持ちを心がけること』を意識することを学んだ。」などの感想があった。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数及び不登校者数については、それぞれ1名と0名で、昨年度から変化はない。

イ その他の指標による評価

遅刻者数は昨年度から、少数の状態を維持している。

一人あたりの欠席日数が、各学年とも大きく減少した。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

各項目について、学年が上がるごとに上昇する傾向にある。

生徒は、コミュニケーションスキルトレーニングにより、自己有用感を得るとともに、ピア・サポートにより、相手の気持ちを理解する力を伸ばすことができた。

エ 生徒の変容した姿

人の話に十分に耳を傾けることができなかつた生徒が、傾聴することができるようになってきている。

2 課題

2名のスクールカウンセラーの効果的な役割分担について、検討する必要がある。

年間の放課後活動計画の見直しをする必要がある。

3 次年度に向けて

「ほっと」及び「アセス」を計画的に実施し、分析結果に基づいて、スクールカウンセラーの役割分担に活用する。

放課後活動を活性化し、生徒が安心・安全に学習できる環境について、より一層の整備を進める。

北海道大野農業高等学校

課程： 全日制
 学科： 農業科
 生徒数： 334名

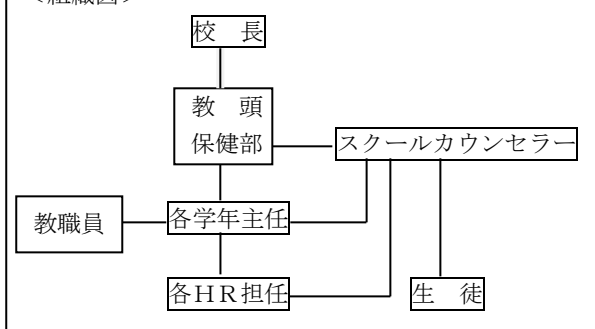
1 取組の特徴

- (1) 「ほっと」等のアセスメント検査の結果や学年別の生徒理解会議による生徒状況の把握
- (2) 農業高校の特色である販売会や異年齢交流の活動を通じた、コミュニケーションスキルと自己有用感の向上
- (3) スクールカウンセラーと教員のコンサルテーションによる生徒状況の把握

2 取組のねらい

コミュニケーションが苦手な生徒、集団生活になじめない生徒、心的な悩みを抱えている生徒が多く見受けられていることから、学校生活や卒業後の社会生活において円滑な人間関係を構築するためのコミュニケーションスキルを身につけること、自己有用感を向上させることを目的としている。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>5月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大野幼稚園の園児との交流 ・北斗市立谷川小学校2年生との交流 ・北海道教育大学附属特別支援学校の生徒との交流 ・大農苗販売会 ・高齢者との農業交流(～11月) <p>6月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども理解支援ツール「ほっと」の実施 ・大農ショップ「鹿島屋」での生産物販売 <p>8月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校適応感検査「アセス」での実施 <p>10月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・老人ホーム「美ヶ丘」収穫感謝祭ボランティア ・農業高校食彩フェア販売会 | <p>10月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事故なしキャンペーン ・親子ふれあい体験教室 ・緑園祭(学校祭)生産物販売会 <p>11月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大阪福島聖天商店街での販売研修(2学年見学旅行) <p>12月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サンタクロース活動 <p>1月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成的グループエンカウンター(1学年宿泊研修) <p>2月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育相談に関する研修会 |
|--|---|

4 取組の内容

1 高齢者との農業交流

(1) ねらい

高齢者のQOL(生活の質)向上を農業分野から捉え、健康増進活動としての「交流菜園作り」や疾病予防活動としての「お弁当作り・お菓子作り」を通して、高齢者と交流しながら高齢者福祉を考えるプロジェクトである。この活動をすることにより、農業クラブの「社会性」「科学性」「指導性」を生徒が身に付けることを目的としている。

(2) 対象

生活科学科 生活福祉班 2学年～3学年

(3) 内容

- ・家庭菜園交流：ミニトマトとキュウリの播種から収穫まで。
- ・お弁当・お菓子交流：高齢者に適した食材を使う。



(4) 成果と課題（○は成果、●は課題）

- 自分たちの考えや思いを高齢者に伝え、それを好意的に受け止めてもらえたことで、自己有用感を高めることができた。
- 交流菜園作りの参加者の話を聞いた方から、参加の問い合わせがあったこと、この取組により『ボランティア・スピリット賞「コミュニティ賞」』を受賞したことから、生徒は自らの実践に対する自信を深めることができた。
- 農業に関する知識が十分でないために、高齢者からの質問に的確に答えられないこともあったので、高齢者についての学習だけではなく、農業についての事前学習を充実させる必要がある。

2 大阪福島聖天商店街 販売研修(見学旅行)

(1) ねらい

文化や価値観の異なる道外(大阪)での商品販売を通して「どのような言葉遣いでお客様に接し、商品を販売するのか」「通り過ぎようとするお客様をどのように引き止めるか」「自分の学校や商品をどのように説明するのか」を体験学習させる。

(2) 対象

第2学年全員

(3) 内容

商品販売：ジャガイモ(メークイン、男爵、キタアカリ)、ニンジン、マルメロ、りんご他



(4) 成果と課題（○は成果、●は課題）

- 本校の商品を目当てに買ってくれるお客とは違い、「北斗市ってどこ?」「マルメロって何?」と聞いてくる方々に対する接客は、コミュニケーションスキルを向上させるよい経験となった。
- いつもと異なる状況で苦勞しながらも、商品をほぼ完売することができたことにより、今まで経験したものとは違う充実感を味わうことができた。
- 本校を全く知らない方々へ、学校や商品についてうまく説明をすることができない場面があったことから、説明内容についての事前学習を検討する必要がある。

【生徒の感想】

- ・たくさん移動して疲れたけど、商店街の方が優しく接してくれ、楽しく終えることができました。販売も売れるのが嬉しくて、まだまだやりたかったです。
- ・結構商品が売れたし、大阪の人たちも喜んで買ってくれました。
- ・生産物販売の途中で雨が降ってきたので大変でしたが、商品の宣伝をがんばりました。

4 取組の内容

3 構成的グループエンカウンター

(1) ねらい

生徒同士が協力して体を動かすことで、人と人とが支え合う信頼体験を体で感じてもらうことを目的としている。

(2) 対象

1 学年

(3) 内容

引っ張り相撲、トラストアップ、トラストフォール他

(4) 成果と課題（○は成果、●は課題）

○ 宿泊研修に出発する直前に学校で実施したことで、和やかな雰囲気が出発することができ、良好な人間関係作りの一助となった。研修期間中も大きなトラブルもなく、ほとんどの生徒が楽しく過ごせたことから、出発直前の実施が、宿泊研修全体により影響を与えたと考えられる。

● 本校の生徒には、体を動かすグループエンカウンターに人気があるので、生徒が楽しんで取り組めるよう、多くの種類のレパトリーを探す必要がある。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

・昨年度と比較して、就職への進路変更以外の中途退学者数が減少した。

イ その他の指標による評価

- ・保健室利用者数は昨年度と比べて大幅に減少している。
- ・1人当たりの欠席人数は昨年度と比べて減少している。
- ・ボランティア活動等体験活動の参加者人数は、昨年度と比べて増加している。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「ほっと」の結果から、多くの生徒が3年間の学校生活で達成感を得ていることが分かった。生産物育成や販売実習等の機会を利用した異年齢交流を経験することで、小中学校で自己有用感を感じることができなかった多くの生徒が、少しずつ自分に自信を持つことができるようになってきている様子が見られる。

エ 生徒の変容した姿

- ・生徒全体の雰囲気が落ち着いてきている。
- ・自分の進路達成に向けて努力する生徒が増えてきている。

2 課題

「ほっと」などのアセスメント検査の結果を、効果的な生徒指導の指標として活用するために、引き続き教員研修等を行う必要がある。

3 次年度に向けて

- ・今まで以上に、生徒自身が意欲的に取り組める交流活動の工夫・改善を図る。
- ・「ほっと」等のアセスメント検査をより効果的に活用する方法を考える。

北海道函館中部高等学校

課程： 定時制
 学科： 普通科
 生徒数： 102名

1 取組の特徴

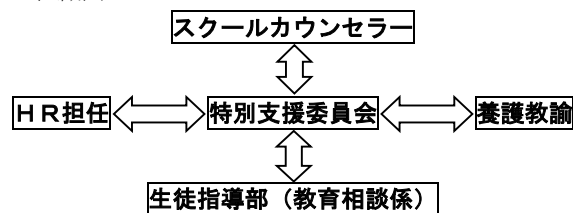
スクールカウンセラーによる構成的グループ・エンカウンターを実施し、人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。

また、子ども支援理解ツール「ほっと」の個人データを参考資料として、学校生活における悩みや不満の早期発見・早期解決を図ることや、教員と生徒の信頼関係を築く機会とすることを目的とする教育相談を年3回行う。

2 取組のねらい

高校入学後、できるだけ早い時期からエクササイズに取り組むことで、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力を育成する。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|--|
| <p>5月 ・子ども支援理解ツール「ほっと」の実施及び教員との教育相談（全学年）</p> <p>6月 ・人間関係づくりを支援する集団カウンセリング（2年）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己理解と他者理解を促す構成的グループ・エンカウンター（1年） <p>8月 ・自己理解と他者理解を促す集団カウンセリング（1年）</p> <p>9月 ・他者理解や自己主張のスキルを育成する構成的グループ・エンカウンター（2年）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動時の問題解決のための指示や意見の言い方を育成する構成的グループ・エンカウンター（3年） ・子ども支援理解ツール「ほっと」の実施及び教員との教育相談（全学年） <p>10月 ・クイズを解きながら、コミュニケーションスキルを育成するトレーニング（2年）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言われて嬉しくなったり、ほっとしたりする「あたたかい言葉」を使うピアサポート活動（1年） ・自己開示と傾聴のスキル向上を目的とした2人組でのトレーニング（1年） | <p>10月 ・グループ活動時の問題解決のための指示や意見の言い方を育成する構成的グループ・エンカウンター（3年）</p> <p>11月 ・人間関係形成能力を育成することを目的とした構成的グループ・エンカウンター（2年）</p> <p>12月 ・人間関係を深めるための自己開示や自己理解、他者理解の能力育成を目的とした集団カウンセリング（4年）</p> <p>1月 ・子ども支援理解ツール「ほっと」の実施及び教員との教育相談（全学年）</p> <p>2月 ・人間関係形成能力を育成することを目的とした構成的グループ・エンカウンター①（1年）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係形成能力を育成することを目的とした構成的グループ・エンカウンター②（1年） ・人間関係形成能力を育成することを目的とした構成的グループ・エンカウンター③（1年） <p>3月 ・人間関係形成能力を育成することを目的とした構成的グループ・エンカウンター④（1年）</p> |
|--|--|

4 取組の内容

1 生徒全員の教育相談

「ほっと」の個人データを参考資料として、学校生活における悩みや不満の早期発見・早期解決を図ることや、教員と生徒の信頼関係を築く機会とすることを目的として、年3回行っている。

生徒数が少ないことをチャンスと捉え、担任以外の教員との教育相談を実施している。担任や養護教諭にも言えなかった悩みを打ち明けることにより、早期発見に至ったケースや、これまでと異なる視点からの助言を受けることにより、生徒が新たな励みを持つに至ったケースもある。

スクールカウンセラーによるカウンセリングスキルの研修を実施し、教員のスキルアップも図っている。



2 ソーシャルスキルトレーニング

スクールカウンセラーによる構成的グループ・エンカウンターを実施し、人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。

高校入学後、できるだけ早い時期からエクササイズに取り組むことで、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力を育成する。



	プラス面	マイナス面	高めたい部分
CP	頑固すぎる 几帳面	大げさ 威いせら	人
NP	親の お世話を焼い	お節か 心にゆきさ	
A	頑固さ 余裕	冷たい	
FC	明るい 言が動かし	お節か 自己中心的	
C	お節か 我慢強い	遠く お節か	

高める方法・・・どうすれば？



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

【中途退学者数】平成26年度・・・2名

平成27年度・・・5名

【不登校生徒数】平成26年度・・・10名 平成27年度・・・0名

イ その他の指標による評価

【一人当たりの欠席日数】平成26年度・・・15.3日 平成27年度・・・11.7日

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

本校生徒の特徴としてどの学年でも「遵守」のスキルが高く、「参加」「緊張」「称赞」「相談」のスキルが低い。仲間と協力することや自己開示ができるようになることが課題である。

エ 生徒の変容した姿

上級生になるほど自己理解、他者理解の大切さを理解し、協調性や我慢などの自律的な行動ができるようになってきている。1、2年生も、落ち着いて授業を受ける生徒、学校行事で仲間と協力して取り組む生徒、教員と対話できる生徒が増えた。

2 課題

年度始めから集団カウンセリングを行うために、カウンセラーへの依頼や計画立案の方法を検討する必要がある。

3 次年度に向けて

ア 教員がコミュニケーションスキルトレーニングの必要性を理解し、日頃の教育活動に積極的に取り入れるように工夫改善に努める。

イ 生徒が「ほっと」を実施する目的を正しく理解するとともに、教員が各自で結果の読み取りを行い、生徒への対応に生かすよう工夫改善に努める。

北海道上ノ国高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 74名

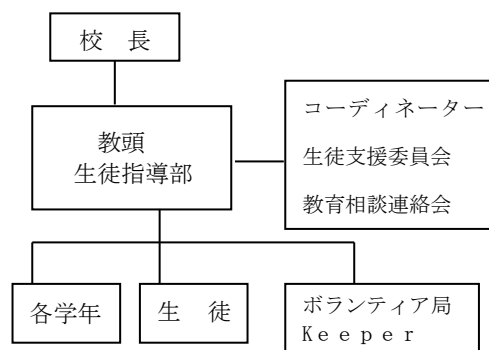
1 取組の特徴

- 1 各学年におけるコミュニケーションスキルアップと対人適応能力の伸長を図り、自己実現及びキャリアデザインの育成に取り組む。
- 2 地域社会や小・中学校と連携したボランティア活動により、生徒のコミュニケーション能力や自己理解能力、他者理解能力及び共感力の育成に努める。
- 3 「全教職員による」教育相談を実施し、生徒情報の共有と適切でタイムリーな指導につなげる。

2 取組のねらい

- 1 子ども理解支援ツール「ほっと」及び学校環境適応尺度「アセス」の調査結果を活用し、教職員による個別相談を一層充実させるとともに、生徒同士が互いに認め合うことができる機会を授業やHRに設けること。
- 2 さまざまなボランティア活動を体験することで人間関係の広がりや自己理解力が深まり、望ましい人間関係づくりの進展と学校不適応の未然防止を図ること。
- 3 生徒が自己理解・他者理解を深め、対人適応能力や社会性の改善を図り、地域でのよりよい人間関係づくりを図る。

<組織図>



※ 「Keeper」とは、本校独自のプロジェクトクラブ「KEEP」参加生徒のこと。「KEEP」とは、グローバル人材の育成を目指し、ボランティア活動等の体験活動を通じて英語力の向上を図るクラブ活動である。

3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月 コミュニケーションスキルアップ活動 (1学年)
 全校クリーン作戦</p> <p>5月 ネパール大震災緊急支援募金活動</p> <p>6月 校舎前庭花壇整備
 ネパール大震災緊急支援募金活動
 「ほっと」1回目
 「アセス」1回目
 コミュニケーションスキルアップ活動 (全学年)
 発達支援ボランティア活動 (月1回)
 (ボランティア局による療育活動)</p> <p>7月 コミュニケーションスキルアップ活動 (2・3学年)
 ユニクロ社”服のチカラ”プロジェクト (町内小・中学校と連携)</p> <p>9月 コミュニケーションスキルアップ活動 (1・2学年、生徒会・ボランティア局)</p> | <p>10月 「豊かな海づくりのための植樹祭」
 コミュニケーションスキルアップ活動 (1・3学年)
 「交通安全キャンペーン」 (町内小・中学校と合同)
 上ノ国町高齢者スポーツ大会ボランティア</p> <p>11月 コミュニケーションスキルアップ活動 (全学年)
 ユニクロ社”服のチカラ”プロジェクト (町内小・中学校と連携)</p> <p>12月 「ほっと」2回目
 「アセス」2回目
 いじめ根絶に向けた討論会 (全学年)
 「喫煙防止出前授業」 (ボランティア局ピア・サポート活動)
 高齢者あての年賀状作成</p> <p>1月 書き損じハガキ回収活動 (町内小・中学校、事業所と連携)</p> <p>2月 教職員研修</p> |
|---|---|

4 取組の内容

1 子ども理解支援ツール「ほっと」の分析結果概要

全校生徒を対象にコミュニケーションスキルアップ活動実施後の12月の結果から、全体的に仲間づくりや自分の意見の表明などの項目が6月よりも上昇した。特に、2学年では率先して行動する項目が1回目よりも8.7ポイント上回り、全校的にコミュニケーションスキルの向上が図られたと考えられる。

2 コミュニケーションスキルアップ活動実践例

(1) **ねらい** 自己理解・他者理解・信頼関係を深める体験活動をすることにより、日常的・恒常的に様々な場面において、良好なコミュニケーションをとることができるようにする。

(2) **対象** 全校生徒

(3) **内容**

ア ソーシャルスキルを学習し、実際に活動場面で使うことを通じて、日常的なスキル遂行を促進する。また、思考ツールを使用して話し合いに主体的に参加することができるようにする。

イ 生徒が自己の認知と行動のパターンを自覚し、コミュニケーション能力の向上といじめやトラブルの未然防止に積極的に取り組み、より良い人間関係を築くことができるようにする。

(4) **成果**

生徒が自己の認知と行動のパターンを自覚し、コミュニケーション能力を活用して、いじめやトラブルの未然防止に積極的に取り組み、より良い人間関係を築くことができるようになった。



5 次年度に向けて

1 成果

(1) **中途退学者数及び不登校生徒数の推移**

中途退学者は皆無となり、不登校生徒数は減少した。

(2) **その他の指標による評価**

ボランティア活動等体験活動参加人数（延べ人数）

	25年度	26年度	27年度（1月末）
参加者数	219人	227人	328人

ボランティア活動の機会と参加者延べ人数は著しく増加した。

(3) **「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概要**

1学年は互いの信頼関係が深まり、2学年は活動場面での積極性が見られるようになった。また、3学年は自分の意見を表明したり率先して物事に組み入りたりするなど、コミュニケーションスキルが向上した。

(4) **生徒の変容した姿**

生徒はコミュニケーションスキルの学習や思考ツール使用等を通じて、各教科授業の意見交流や発表等、言語活動に順応し、主体的に活動できるようになった。また、自主的・主体的に学年混合のグループ形成、グループ討議のリーダーシップ、いじめの原因を分析や洞察を行い、学校独自のいじめ根絶宣言を練り上げ、完成させることができた。

2 課題

生徒の主体的な言語活動において、意見を言えない生徒や、意見を理解しにくい生徒に対する支援の方法を生徒支援委員会で検討し、全体に周知、実践していく必要がある。

3 次年度に向けて

多様な傾向を持つ生徒全員のコミュニケーションスキルの向上に今後も継続して取り組んでいくために、これまでのステップアップ・プログラムの実践の成果を基に、学校行事や進路活動など1年間の教育活動と歩調を合わせた活動を、教員が企画、立案し、実施していく。

北海道奥尻高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 44名

1 取組の特徴

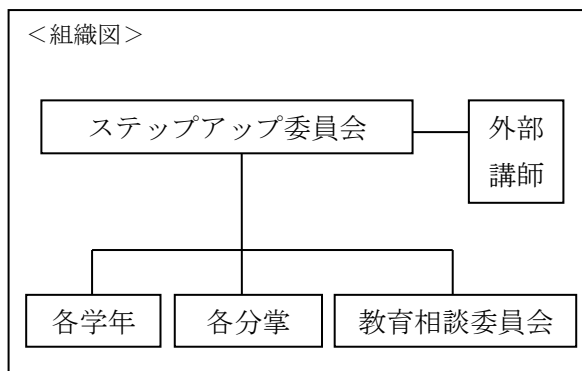
「ほっと」等の質問紙調査の結果と教職員による観察から、本校生徒のコミュニケーションに関する課題を明らかにし、その情報をもとに、外部講師に全体講話を依頼する。このことにより、生徒のコミュニケーションスキルにおける課題の解決を図る。

また、本校の各種教育活動において、新たに獲得したコミュニケーションスキルを実践して行こうとする態度を育てる。

2 取組のねらい

- 1 外部講師による全校生徒を対象とした講話を実施し、生徒の他者へ配慮したコミュニケーションスキルの理解を深める。
- 2 ロングホームルームを活用し、生徒のコミュニケーション能力を高める実践的なプログラムを実施する。
- 3 講話内容や質問紙調査の結果を活用し、全教員が生徒面談を実施し、組織的に教育相談活動を進める。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>5月 緑の募金運動 (ボランティア局)
校門前と前庭の花壇作り
(環境委員、ボランティア局)</p> <p>7月 Hyper-QU 1回目 (1学年)
アセス1回目 (2・3学年)
「ほっと」1回目 (全学年)</p> <p>8月 外部講師による全体講話1回目</p> <p>9月 全教員による生徒面談実施1回目</p> <p>10月 アセス2回目 (3学年)</p> | <p>11月 おくしりふれあい広場の運営協力
校門前と前庭の花壇片付け
(環境委員、ボランティア局)
性に関する講話 (3学年)
赤ちゃんふれあい体験 (3学年)
赤い羽根募金活動 (ボランティア局)
外部講師による全体講話2回目
「ほっと」2回目 (全学年)</p> <p>12月 Hyper-QU 2回目 (1学年)
アセス2回目 (2学年)</p> <p>2月 全教員による生徒面談実施2回目
第39回町民スキー大会運営協力 (ボランティア局)
性に関する講話 (1・2学年)</p> |
|---|---|

4 取組の内容

- 1 「ほっと」、アセス、Hyper-QUによる生活アンケート調査
 - (1) ねらい
 - ア 外部講師来校前の7月と来校後の11月に実施し、生徒のコミュニケーションスキルの変容を把握すること。
 - イ 調査結果を教員全体に周知し、課題のある生徒の状況や今後の指導方針の共通理解を図る。
 - (2) 対象 全学年
 - (3) 内容 「ほっと」は全学年、アセスは2・3学年、Hyper-QUは1学年で実施

4 取組の内容

(4) 成果

ア 「ほっと」

1 学 年	1回目の調査では、態度で拒否を示す傾向にあることと、他者への配慮が苦手だという課題があるということが分かった。しかし、2回目の調査では、他者への配慮が少しずつできるようになってきたことが分かった。
2 学 年	1回目の調査では、他者に配慮した自己表現が苦手であり、特に女子において感情的に拒否を示す傾向にあるということが分かった。さらに、クラス全体としては役割に基づいた行動が苦手であることも分かった。しかし、2回目の調査では、1学年同様、他者への配慮ができるようになってきていることが分かり、実際に寛容的なコミュニケーションが多く見られるようになった。
3 学 年	1回目の調査では、相談項目以外の項目がとても高く、自己開示以外のコミュニケーションスキルへの不安は少ないと考えられた。2回目の調査結果は1回目の調査結果とほとんど同じであった。しかし外部講師による講話の影響もあり、クラス内での話し合いの場面において、リーダーシップとフォロワーシップがそれぞれ発揮され、話し合いが学級全体のものになっていた。

イ アセス

年2回実施し、比較検討することによって個々の生徒の適応感の変容を読み取っている。数値が大幅に変動した生徒については全教員で共有し、丁寧な声かけや教育相談等を実践している。

ウ Hyper-QU

生徒個人の学級への適応感や表面に出てこない悩みや抱えている課題などを、その分析結果から把握することができ、生徒理解に活用している。

2 外部講師による全体講話

- (1) **ねらい** クラス内の話し合いの場面等において、声の大きい1つの意見で全てが決まってしまう場合があった。また、島外からの来校者等へ非寛容的なコミュニケーションをとる場合が多い。

このようなコミュニケーションに関する課題を解決し、良好な人間関係を構築できるようにする。



- (2) **講 師** スクールカウンセラー 小幡 昌志
北海道医療大学研究生 西塚 拓海

- (3) **内 容** 小幡氏にはアサーティブなコミュニケーション等について、西塚氏にはリーダーシップやフォロワーシップの関係等について演習を交えながら講話していただいた。

- (4) **成 果** コミュニケーションの在り方や手法等について理解を深めることができた。

- (5) **生徒の感想（一部）**

- ・相手の気持ちを考えて接しなければならないと思った。共感がとても大事だと感じた。
- ・当たり前なのに気がつけて良かった。中学生の頃は悪者を作っていた。
- ・相手を傷つける言い方をしていたかもしれないので、この講話で学んだ、相手も自分も尊重するコミュニケーションを取ろうと思った。社会に出ても使う話だったので、これから実践しようと思う。

3 ボランティア活動への参加

- (1) **ねらい** 外部講師による全体講話から学んだコミュニケーションスキルを実践しながら、積極的に行事の運営に参加することで、地域住民との交流を深めながら生徒の社会性を育む。

- (2) **対 象** ボランティア局員

- (3) **内 容** 11月に行われる「おくしりふれあい広場」と、2月に行われる「町民スキー大会」の運営に協力する。

- (4) **成 果** 全体講話での講師から学んだ、相手を配慮しながら自分の意志を伝える技術や、相手の話を聴く技術等を生かしながら、地域住民との交流を深め、町内行事の運営に貢献することができた。



4 取組の内容

4 その他、生徒のコミュニケーションスキルの課題に対する取組

(1) 主体的・協働的な学びの実践

自信がないため、授業中に質問ができなく、理解が深まりにくいという状況にあったが、コミュニケーションスキルを学んでからは、普段話をしない生徒同士でも積極的にグループ活動ができたり、大人しい生徒もグループのリーダーとなって活躍したりする姿が見られるようになった。

(2) 島外からの訪問者による交流会

島外からの訪問者など、初めて会う人に対して強い警戒心を持ち、相手を否定的に捉えがちであったが、講話後、島外からの訪問者に対して堂々とした態度で質問することができるようになり、また、訪問者からの質問に対しても自信をもって応対することができた。

(3) 教育相談週間

生徒がコミュニケーションスキルを獲得することにより、自分の気持ちや悩み、心配事等を素直に相談できるようになった。さらに、教員の生徒理解も深まった。

(4) 部活動（吹奏楽部）での取組

練習等で失敗した場合に、他の部員からの目が気になり、疑心暗鬼に陥りがちだった。しかし、講話後は、生徒が学んだ他者を配慮したコミュニケーションの方法を積極的に活用し、さらに、部活動の顧問による相手の長所を認め合う活動の相乗効果により、部員同士の中で、相手を認め合う発言が増加した。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者と不登校生徒は前年度同様見られなかった。

(2) その他の指標による評価

現段階で、保健室利用者数に大きな変化は見られない。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

良好な人間関係を構築するために必要なコミュニケーションスキルが向上し、他者へ配慮しながら自己表現をすることができるようになった。しかし、悩みを打ち明け、心配事を相談できるような思いやりのある集団作りに課題が見られる。

(4) 生徒の変容した姿

本校の生徒は「1 教員や友人に質問したり相談したりすることができない」「2 特別活動等における生徒同士の話し合いの場で数名の生徒の意見が全体の意見になってしまうことが多い」「3 新しい出来事や初対面の人への警戒心が強い」といった課題が見られた。

1に関してはまだ課題が残る部分が多いが、教員への質問に関してはやや改善されている。2に関しては、かなり改善され、リーダーがクラス全体の意見をきちんと拾い上げたりクラス全体がリーダーを支えるような姿が見られるようになった。3に関してもかなり改善され、島外からの訪問者に対しても臆することなくコミュニケーションをとることができるようになった。

2 課題

(1) 良好な人間関係を構築するコミュニケーションスキルは向上したが、悩みを打ち明け、相談できる思いやりのある集団作りに課題が見られる。

(2) コミュニケーションスキル向上に関する啓発活動は、外部講師の講話によるところが大きく、本校教員自身が生徒へ啓発できるよう、研修を深める必要がある。

3 次年度に向けて

生徒がコミュニケーションスキルを実践できる場を、三年間の学校教育の中で意図的、系統的、組織的に設定する必要がある。

その足掛けとして、質問紙調査の分析方法について校内研修等の場で教員全体に周知を図る。また、教育相談を行うときに、各自で分析した情報を活用してもらうよう呼びかける。